


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員 (主査)

奴田原 聡明 

論文概要

本論文で扱うジャーヒリーヤ詩（前イスラーム期のアラブ詩）は、アラビア半島の沙漠をその発祥及び発展の地とし、遊牧に生きる幾多の部族民によって産み出され、後世においてアラビア文学の源と目される栄誉を担うものであった。

7世紀となって預言者ムハンマドが出現し、アッラーが天使ガブリエルを通じてムハンマドに啓示を下したとき、それを表現する言葉としてジャーヒリーヤの詩語が中心的な役割を担った。各部族民はそれぞれの方言を持っていたが、詩の創作は各方言を基にしながら、部族に共通の洗練され昇華された共通詩語とも言うべき一種の文語を持つに至り、後にそれはアラビア文学の規範とされるものともなった。その後コーランの解釈における研究において、アラビア語の語彙と文法構造の厳密な研究が要請されたが、その際イスラームの誕生と成立を準備したジャーヒリーヤ時代の古詩が当然の結果として典拠とされた。かくしてコーランおよびハディース（預言者ムハンマドの言行録）の研究にはその母胎ともいうべきジャーヒリーヤの詩の研究が必須となった。これらの詩は口承により語り伝えられたものであるから、その過程で入り込む改変や誤謬を全く否定することはできないが、現代に伝わる大部分のジャーヒリーヤ詩は典拠を持つ信憑性のあるものと見なすことができるとされている。またコーラン研究には宗教的熱情に負うところが大きであったため、その成果には目覚ましいものがあったが、その反面イスラームの神学にそぐわぬものが捨象されるという弊は免れ難かった。そのためイスラーム文化の根源に関わりながらも十分に研究がなされずに残された領域もあったが、ジャーヒリーヤの詩の研究にもそのような傾向が認められた。アラビア文学の母胎にして、かつ後生の詩人たちにそれを凌駕することを容易に許さぬほどの高い水準にすでに達していたジャーヒリーヤ詩の研究が欧米の学者の間でも高まったのは頷けるところであり、この分野の研究はアラビア文学、ひいてはイスラーム文明の最も正統的かつ中心的研究分野となっている。

*

本論文は論文題目を「前イスラーム期アラブの盗賊・無頼詩人サアーリーク：逆転世界のヒーロー」として、前イスラーム期、つまりイスラーム台頭の前期（一般にジャーヒリーヤ時代と呼ばれる）においてアラビア半島におけるベドウィン社会に見られた詩人たち、とりわけ部族社会から放逐されたアウトロー的詩人たち、サアーリーク（単数形スウルークの複数形）に着目し、まず部族社会内で評価あるいは認知された部族詩人たちの存在を踏まえた後、それとの対比において、サアーリーク詩人が遺した口承詩（定型長詩・カスィード）を注意深く読み解く作業により、その深層構造に迫り彼等の存在の意味を新たに問い直そうとする。

本論文は大きく二部に分けられ、第一部「詩人たち」では詩人論が、第二部「詩」では主に詩論が展開される。第一部は二章に分かれ、第一章「部族社会における詩人たち—全般的状況」では、詩を読むという行為の社会的機能が述べられ、それを担った部族社会における詩人たちについて、先ず部族詩人たちが置かれた社会的位置、彼等の創作する詩の持つ機能、詩に使われた言葉に付された靈的力、公的機能を帯びた挽歌（復讐を誓い部族意識を昂揚させ、かつ鎮魂するという公的機能を持つ）としての詩、ムルツワに集約される部族社会の理想的価値観や美德について述べ、これらの諸特性は過去の遺産として終焉してしまっているのではなく、現代にも存続し続けていると結んでいる。

第二章「サアーリーク詩人—虚実のはざま」においては、まず主流派である部族詩人たちに対して、部族社会から追放された放浪の無頼詩人たち・サアーリーク詩人が実在したか否かについて吟味がなされている。口承によって伝えられるという条件下では、彼等が実在したとは断言しきれない点が残るとあくまで客観的な見方をとりながら、彼等に纏わる口頭伝承であるアフバール（当時の詩人たちの出自や生涯に関する伝記情報や逸話、さらに詩人が作品を詠んだ時の状況などに関する情報の集成されたもので、詩集、伝記、伝承集、事典、辞典の母体を形成した）によって、サアーリーク像に光を当てようとする試みがみられる。アフバールは詩自体との相互作用によって当時の部族社会の事象を伝える重要性を持つが、その多くに虚構性や説話的性格が認められるという、口承による伝達の結果としての制約を踏まえながら、本論ではアフバールに関し、事実か虚構かに拘泥するよりもむ

しろそれを歴史的、伝記的事実と虚構が入り組んだ物語として捉え、サアーリーク詩人の作品を読み解く鍵を与えてくれる社会的、心理的、象徴的側面における有効性を重視しようとする。そこでアファールの虚構性を積極的に受容しながら、その上でそれらの詩の深層に潜む意味を解き明かす注釈としての機能を重視し、そのような観点に立ってジャーヒリーヤ詩論が展開される。

このような新たな捉え方に基づくアファールの分析を通じて、山本氏は部族社会に対するサアーリーク詩人の対応の仕方においては、「反一部族」、「越境的」、「疑似一部族」の三つの異なるパターンが見られるという興味深い見解を提示し、さらに部族詩人との対比においてこれらの三つの要素は、「脱一部族性」という共通の特性に集約されると結論づける。

第二部における詩論の展開では、まず第三章において「カスィーダの構造」として部族詩人の創作による古典詩型としてのカスィーダに関し論述がなされている。

長い歴史と伝統を誇るアラブ世界の研究者たちによる詩論において、カスィーダは常なる研究の対象とされてきたが、同時にアラブ・イスラーム的知の傾向による制約（例えば宗教学、言語学、あるいは修辞学などの諸学への偏重）も受け、伝統的カスィーダ観には偏向が見られ必ずしも満足のゆくものではなかったため、欧米においてはアラブ世界において新たな詩論の試みがなされてきた。山本氏はそれらの研究成果を注意深くフォローしながら、S・ステトキヴィッチの提唱する「通過儀礼パラダイム」に着目し、それに修正を加えた上でアルカマという部族詩人のカスィーダにその理論を適用させてカスィーダの基本構造を解明しようと試みる。

すでに定型長詩としてのカスィーダは、これまでの研究により、第一・ナシィーブ、第二・ラヒール、第三・ファフル、マドゥフ、ヒジャーなどからなる三部構成をその基本パターンとすることは明らかとなっている。しかしながら何故それらのテーマが一定の順序を保って現れなければならないかについては未だ解明されていない。そこで山本氏は既述のS・ステトキヴィッチの「通過儀礼パラダイム」を援用し、それによって既述の三部構成には人類学における通過儀礼の分離separation—周辺margin—再統合aggregationの過程との相似が認められることを指摘し、その方式に従って部族詩人のカスィーダを読み解いた結果、そもそもカスィーダは部族社会の理念や価値観の表出であり、同時にそれらを構築し維持する装置でもあったことを見いだすに至る。つまりカスィーダの目指すところは、部族社会に求められる理想的人間像の成長・育成、或いは再生の過程を象徴的に表し、さらに部族共同体の再生と永久の繁栄への道程を描くところにあるとする。それに比してサアーリーク詩人が産み出した詩は明らかに異質なものであり、部族詩人たちの志向する理念に抗するものであり、既述の三部構成に従わなかった点こそサアーリーク詩の特性があるとする。

最後の第4章「サアーリークの詩—トリックスターとの近似を手がかりに」においては、サアーリーク詩人に見られた、逸脱、過剰、秩序の攪乱、利己心などの諸要素には、神話的いたずら者「トリックスター」との共通点が見いだせることに着目し、両者の近似性を検討しながらサアーリークの詩の世界をトリックスターとの比較により一層鮮明に提示しようとする。これまでの論述から明らかのように、トリックスターの資質を備えたサアーリーク詩人の詩の世界は部族詩人たちのそれとは対照的に、部族社会で認知されている取り決めやそこで確立された諸関係を揺さぶり、覆し、揶揄や嘲笑の対象とし、既成の部族的価値観を震撼させ、逆転させるという側面を特徴的に持った。そのみか、サアーリークによる反逆的価値観は、安逸な時の経過の中で弛緩した兆候さえ見せる部族社会の体軀に外界からの新鮮な血のごとく注入され、この新たな価値観の注入によって部族社会の構成員たちを覚醒・活性化させるという側面が認められた。これら部族社会からの逸脱者たち、サアーリーク詩人は皮肉にも、彼等の置かれた逆境を一つの梃子とし、そこで錬磨した個人的抜群の能力、新たに獲得された逆転的価値観により、新たな価値の地平を拓き、それによって部族社会を蘇生させ、活力を与えるという肯定的効果を持ちに至った。つまりサアーリークの詩の世界は既存の部族社会の価値観を否定し覆すという側面と同時に、より深い本質的な価値観を掘り起こして部族社会を活性化するという、相反する両面を備えていたと結論づける。

評価

口頭による最終試験において、審査委員諸氏からは、論文は全体的に見て、論旨が明解であり、問題設定もよい。また格調が高く、手堅く、よくまとまっているという全般的な評価がなされた。さらに本論文には文学・社会学的、或いは歴史・社会学的とも言い得るような、二つの学問領域に跨る方法論的立場が伺えるという評価もなされた。博士前期課程で提出された山本氏の論文「ジャーヒリーヤ詩の美的イデオロギー；イムルウ・アル＝カイスのムアッラカを中心に」と並べてみると、一層論旨が明確になり、かつ深みを増しており、本論文には確実な向上が見られ、論文として成功しているという評価も与えられた。

他方本論文には高雅なジャーヒリーヤの詩の訳文も含まれ、また論文の性質（純粹に文学の分野）に鑑みて、今一層の鍛錬がなされ、香り高い文章を望むという意見もあった。また文中、よりの確な語彙の選択が可能ではないかと思わせる箇所があり、今後語彙に対するより注意深い配慮が必要との指摘がなされた。

本論文の内容に関しては以下のような評価がなされた。

イスラームの誕生と成立を準備したジャーヒリーヤ時代には顕在していたが、イスラームの台頭時以降、その理念や主張と抵触するが故に不当に扱われ、或いは一時的に歴史から抜け落ちるといふ事象が見られたが、山本氏の論文はカスィーダ、とりわけサアーリークのそれを分析することにより、アラビア文学の根底に内在するこれらの貴重な部分を掘り起こし、本来の正当な位置に復権させようとするオーソドックスな学問的営為の脈絡によく連なりうるものである。

このようにジャーヒリーヤ詩はイスラームによりある種のフィルターをかけられ、その後には再構築されるという経緯を経ているため、資料の扱い方にも慎重な配慮が求められ、論を構築する作業には困難を伴うが、本論文はそのような困難をよく乗り越え、その骨格を明確にしつつ全体として説得力を持った論究となり得ている。

その過程において以下のような諸点が評価される。

部族詩人との比較においてサアーリーク詩人を捉らようとしているが、比較の手法が効を奏しており、多様な側面から照射されたサアーリーク像はそれぞれが生彩を放ち、かつ明確に描かれている。

テキストとしてのカスィーダを丹念に読み、従来のカスィーダ研究の成果と同時にその限界をもしっかり踏まえ、そこから出発したカスィーダを読み直そうとする新たな研究の潮流を視野に入れながら、カスィーダの構造を「通過儀礼のパラダイム」により説明しようとするS.ステトキヴィッチの論を援用しつつ、山本氏は部族詩人アルカマの代表作の一つを使ってカスィーダの構造を検証する。このようにS.ステトキヴィッチの論に沿いながらも、そこではサアーリークの文学世界が包摂する魅力や文学性を十分に捕らえ得ておらず、また通過儀礼の過程とのアナロジーに固執することによりサアーリークの存在を狭い枠に閉じこめてしまう結果を招来していると山本氏は批判する。その上で山本氏はサアーリークとトリックスターの近似性に着目し、両者の類似性を駆使して、前者の像を明確にしようとする。またサアーリークの雄・タアッパタ・シャッラン等の詩を詳しく読み解きながら、サアーリークの特質として価値の転倒（部族社会とその価値観を逆に撃つ）の逆転劇を論証し、否定的存在とされてきたサアーリークが果たした社会への活性剤としての肯定的、建設的側面を提示している。

その際、アフパールには伝記的事実と虚構が紛れ込んでいるため、歴史的事実としてではなく、サアーリーク詩人の作品を読み解く鍵として見るという慎重な視点が選ばれ、それに基づいて論が進められているが、そのような視点に立ってなされたアフパールの分析結果は十分に説得的であり、サアーリークが共有する特性としての「脱一部族性」へと着実に論究が進められている。

既に述べたように、S・ステトキヴィッチの方法論を重視し、それを吸収すると同時に批判的に乗り越えようとする推論の過程が本論文の主要部の一つをなしているが、その点は手堅く、論文として成功しているという評価にも結びついている。このようにその目標は充分達せられていると評価されたが、最終章における自身の独創的な論を展開する部分は全体とのバランスから見ても、より多くの比重をかける余地が残されているのではないかという指摘がなされた。

本論文ではジャーヒリーヤの詩がテキストとして重要な位置を占めているが、一般にジャーヒリーヤの詩は以下の点で難解だとされている。同義語が多用される。表現が極めて簡潔直裁で、説明的要素がない。沙漠の具体的事象の細部が拡大鏡で見るように子細に表現される。一つの語彙に複数の意味が含まれる場合があり、これが他言語への翻訳を困難にする一因となっている。原典に誤記が多い。このような諸々の理由のため、カスィーダを読むことはかなり困難となるが、山本氏の論文では資料としてのカスィーダが十分に読み解かれ、カスィーダの構造が正確に明示されるに至っている。因みに山本氏は本論文執筆に従事していた間、1997年からの3年間、折良くエジプト・カイロ大学へ留学の機を得、地の利を生かしてアラブとりわけエジプトの研究者たちに親しく接し、また資料を読む十分な訓練をすることができたが、その時期の研究の着実な成果が、論文の隅々に伺える。

本論文の主脈は、従来のカスィーダ観を批判的に捉らえ、新たな視点によってカスィーダには部族社会の再生や永続を志向するという点が指摘され、さらにその詩の持つ力によりサアーリークの存在が部族社会を活性化させる力を逆転的に持つという結論へ収斂してゆくのだが、その過程で様々な想念が喚起され、または貴重な指摘や示唆がなされているが、それらも本論文による収穫と言えよう。

また本論文は時代を遙かに遡り、沙漠という風土においてペドウィンによる歴史的かつ文学的営為を辿るものであるが、それは過去の遺物ではなく時空を越えて今日まで脈々と受け継がれ、そこには我々定着民のそれとは異なるもう一つの文化事象（感性が基軸をなす世界、コンプレックスとしての恥の意識、堅固な父権制社会、個人の力を誇示し競う性向、ジンのばっこする世界）が豊かに盛り込

まれ、これらの事象はジャーヒリーヤの詩の鑑賞ひいては本論文の理解において重要な要素ともなっているが、これら幾多の示唆が合わさって、本論文を意味深く、かつ魅力あるものになっている。

その他、より広い視野に立って、次のような評価や指摘がなされたので付記する。

本論文に現れる「父の喪失」というテーマは文学的にも普遍的な豊かな水脈となるテーマであるとして、フランス文学における幾つかの事例が示された。またサアーリークの存在は日本文学における無頼派作家を連想させるものがあるとして、比較の観点から太宰治の例が挙げられ、さらに文学上のテーマを扱う際の注意すべき点に関するアドバイスがなされた。いずれにしろこれらの議論を通じて、本論文が普遍的な文学的テーマを豊かに包含していることが示された。

論文の構成について複数の委員から技術的な面での指摘があった。基本的視点は連続しているため、理解に支障はないとはいえ、同じ議論が重複する箇所が指摘された。この点は論文の構成を工夫することにより避けられ、論点をより効果的に煮詰めることができるという助言がなされた。

最後に今後の研究に関して、山本氏はこれからもサアーリークの研究を深め、そこで研究の独自性を出すことに一層努めたいと考えるが、その際さらに時代枠を広げて、イスラーム以降の時代に見られるサアーリークの系譜に繋がる無頼・異端的詩人や作家たちをも研究の対象にしたいとの構想を述べた。